

「国」と「国」の関係が軋^{きし}む時こそ 「人」と「人」はつながりたい。

青い目の人形の運命

横浜のマリンタワーに隣接して、「横浜人形の家」という博物館がある。この博物館に入ると、最初に展示してあるのが「青い目の人形」だ。



童謡にも歌われた「青い目の人形」は、1927年にアメリカから日本に親善大使として送られてきた。

13000体が日本に送られ、返礼に日本からも58体の日本人形がアメリカに渡って親善大使を務めた。

だが太平洋戦争が勃発すると、「青い目の人形」は一転「鬼畜米英」の人形として悲劇の運命をたどることになる。

多くの人形が火の中に放り込まれた。中には竹槍で“公開処刑”されたものまであった。

いったい、人形に何の罪があったというのだろう。

本来、「政治」と「個人」や「文化」は別のものであるはずだ。だが政治的な対立がエスカレートすると、この区別がつかなくなる。

「青い目の人形」は一転、アメリカの象徴として“処刑”されるに至る。

いま領土問題などをめぐって、日本と韓国や中国の関係に大きな軋轢が生じている。中国で“日本”に対する反感が高まる一方で、日本でも“中国”への感情が悪化する。

だが、そこでいう“日本”や“中国”とは何なのだろう。政治方針のことなのだろうか。それとも、個々の人々のことなのだろうか。

政治家が友好関係を壊す

8月の下旬、私は韓国にいた。韓国の多文化政策を調査する研究チームの一員としてだ。

出発前、私の家族は口をそろえて心配した。

「いま、韓国に行って大丈夫なの……？」

だが訪れた韓国で、少なくとも私たちは「危ない」思いをすることなど一度もなかった。

ソウルの繁華街には韓流ツアーの日本人観光客があふれ、韓国の市民団体に招待された東北の被災地の子どもたちが和太鼓の演奏を行っていた。

夜、私たちは韓国の研究者と交流を持った。話題は当然日韓関係に及ぶ。だが、私たちと韓国の研究者たちは論争になるどころか、双方の見解はほぼ一致した。

「市民が友好関係を築いても、政治家がぶち壊しにする。石原慎太郎も李明博もロクなことをしない。」

彼らは比較的リベラルな研究者だったことを割り引く必要はあるだろう。だが、どの国にだって多様な意見はあるのだ。

「反日デモ」によって放火や略奪を受ける中国の日系スーパーの映像だけを見れば、“中国”に対する反感が増幅するのは当然だろう。

だが、日本人全員が石原慎太郎ではないように、韓国にも中国にもさまざまな人がいる。意見がある。

“日本人”“中国人”と一括りにすることなど、とうていできない。「政治」と「個人」は峻別されなければならない。

標的にされる子どもたち

だが、日本でも「政治」と「個人」の混同は広がっているのかもしれない。

日本ではあまり報道されないが、新大久保のコリアタウンでは「韓国人は出て行け」などと叫ぶデモが頻発している。

韓国大使館に対するデモではない。コリアタウンに対するデモだ。



韓流ショップの店員が罵声を浴びせられ、「韓国人を殺せ」というシュプレヒコールさえあがる。



昭和18年毎日新聞

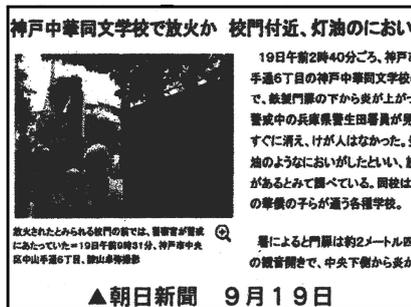
もはや「政府の行為」に対する批判ではない。差別・排外主義そのものだ。

政府と政府の関係がどうであろうと、「青い目の人形」にもKポップにも、中国の「イトーヨーカドー」にも罪はない。

だが、目の前にある他国家や他民族のシンボルは格好の攻撃目標となる。特にそれが弱ければ弱いほど、攻撃はたやすい。

もっとも「弱い」者とは誰か。それは子どもたちだ。

9月19日、在日華僑の子どもたちが通う神戸中華同文学学校の校門に灯油がまかれ、火がつけられていたことが発覚した。



大事には至らなかったが、子どもたちに与えた恐怖はどれほどのものだっただろう。

もちろん、いすれも極端な例だ。だが、日本でもこうした事態は起きているのである。

中国や韓国にも日本人学校があり、おおぜいの日本人の子どもたちが通っている。日本の学校にも、中国や韓国・朝鮮につながる子どもたちがいる。この子どもたちが「政治」に巻き込まれ、辛く悲しい思いをすることがあってはならない。

はっきりさせておきたい。

「政治」と「子ども」は、全く別だ。領土問題について、子どもたちに何ら責任はない。

ニエアル碑の来歴

私たちに示唆を与えてくれる逸話が、藤沢にある。

今から70年前、鵜沼海岸でひとりの中国人青年が亡くなった。水泳中の事故だった。

男性の名はニエアル（聶耳）。のちに中国国歌となる「義勇軍行進曲」の作曲家だ。

「起て、民衆よ！ 奴隷となるな！ 人民の力で中国を守れ！ 前進！ 前進！」

「義勇軍行進曲」は虐げられていた中国の民衆の士気を鼓舞し、抗日戦を戦う人々に歌い継がれた。

その後アジア・太平洋戦争は終結したが、日本と中国の国交は回復しなかった。中華人民共和国が成立して冷戦が始まると、日中関係はさらに悪化した。当時の日中関係の緊張は今の比ではない。

だがそんな時代だったにもかかわらず、若い音楽家の死を知って、鵜沼海岸にニエアルを悼む碑を建てた

藤沢の市民たちがいた。

ひとりの人間の死に対して、その立場の違いを越えて敬虔でありたい。国と国との関係がどんなに悪化していようと、人と人との関係は別だ。

碑が水害で流されることもあったが、ニエアル碑は市民の手で維持・補修され守られ続けた。

やがて日中の国交が回復したとき、中国の人々はこの話を知ることとなる。

あろうことか、抗日戦のシンボルの作曲家の碑を日本の市民が守り続けてきたというのだ。



聶耳碑（鵜沼海岸）

この話は中国の人々の心を動かした。これが契機となって、ニエアル生誕の地である雲南省昆明市と藤沢市は1981年、友好都市の関係をつなぐこととなる。

ふたつの国が良好な関係にあるときに「友好」を言うのはたやすい。

だが、「国」と「国」との関係が軋んでいるときだからこそ、「人」と「人」はつながりたい。

それが、平和な未来を開くことにつながるはずだ。

「青い目の人形」のその後

なぜ、第二次世界大戦は防げなかったのか。

大戦直後の1945年、教育や文化の振興を通じて戦争の惨禍を繰り返さないために設立されたユネスコ（国連教育科学文化機関）は、その憲章でこう述べた。

戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない

私たちはもう一度、この言葉の意味をかみしめなければならない時代を迎えている。

いま、勇ましい強硬論が力を得る。その一方、状況を冷静に見て理性的な対応を求める声は必ずしも大きくはならない。

だが、このような時こそ、冷静に立ち止まりたい。

強硬論が互いにエスカレートしていけば、その先に何が待っているか。私たちはまだ歴史に学ばないのだろうか。

「青い目の人形」は、そのすべてが“処刑”されたわけではなかった。

わずか300体にすぎないが、時代を生き延びた人形がいた。「非国民」の誹りを恐れながらも、密かに人形を匿った人たちがいたのだ。この話こそ、語り継ぎたい。

二度と、人形が処刑される時代を迎えてはならない。